

第4章

ジュバ・アラビア語におけるトーンのふるまい

仲尾周一郎

1. はじめに

ジュバ・アラビア語は南スーダン（主として南部のエクアトリア地方）で地域共通語・都市言語として話されるアラビア語クレオールである。話者人口に関する推計は存在しない。しかし、千数百万人といわれる南スーダン総人口と、（特に首都ジュバを含むエクアトリア地方の都市部における）その高い社会的なプレゼンスに鑑みれば、数百万人規模を想定することが妥当だと言えそうである。

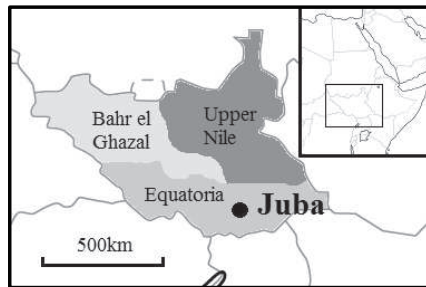


図1. 南スーダン

ジュバ・アラビア語話者の多くは、南スーダンに土着のナイル諸語、スルマ諸語、モル・マディ諸語、ビリ・クレシュ諸語、ボンゴ・パーギルミー諸語（以上、ナイル・サハラ大語族）あるいはウバンギ諸語（ニジェール・コンゴ大語族）の言語を「民族語」として話す。ただし、内実としてはジュバ・アラビア

語を第一言語（唯一の母語、あるいは民族語と同等以上）として話す場合も、第二言語（民族語が第一言語）として話す場合も存在する。これに加え、南スーダン社会は種々の歴史・社会的諸要因（難民化を含む国外から国内への／国内から国外への頻繁な移民など）によって極めて多様な社会をなしており、ジュバ・アラビア語は決して一枚岩的な言語とはいえない。本稿で提示する資料は、筆者が 2010-2013 年代のジュバに住む、ジュバ・アラビア語を第一言語とする南スーダン人（スルマ系テネット人）の若年層話者を中心に収集したデータ（詳細は Nakao 2017 参照）に基づく。

特定の言語においてピッチの実現がそれ以外の構造（分節音の素性、韻律構造、文タイプなど）から完全には予測不可能であり、その違いが意味の弁別に関わりうる場合、その言語においては「トーン」の対立をもつといえそうである。この意味において、ジュバ・アラビア語（および姉妹言語のアラビア語クレオールであるヌビ語）においてトーンが弁別的であることは Nakao (2013, 2017) ほかにて指摘済みであるが、現状ではこの主張を論駁することなく、西洋諸国の研究者によって「ジュバ・アラビア語（やヌビ語）はアクセント型言語である」という無根拠な言説が再生産され続けている。本稿は、広くこの問題を議論可能にすることを目的とする。

さて、ジュバ・アラビア語の語彙の大部分はアラビア語スーダン方言に起源を持つが、上記の基層言語および近隣諸国で話されるバントゥ諸語（ガンダ語やスワヒリ語）からの借用も多く見られる。この結果、ジュバ・アラビア語ではアラビア語的なアクセント・システム（語彙的に指定される韻律的な卓立）と、アフリカ諸語的なトーン・システムが共存する、分裂的なプロソディ・システムが形成されている (Nakao 2013, 2017)。本稿では、最小限の音韻論的解釈により、この現象について整理を行いつつ、ジュバ・アラビア語におけるトーンのふるまいに関するデータを提示する。

本稿ではトーン表記も含め、基本的に簡略音声表記を用いる。ただし、低平板トーン (L) については、それに当たる記号を付さず (à ではなく a [à])、上記の非弁別的な長母音の現れも表記しない。/ai/, /au/, /ei/, /ou/ などの二重母音

は、それぞれ4通りのトーン実現、例えば *ái, áí, ai, aí* がありうる。分節音の実現には個人による揺れが大きいいため、本稿ではその詳細については触れない。ただし、紛らわしい場合に限り、本文中でも必要に応じてやや精密な音声表記を付す。本稿では、広くデータが利用されることを企図し、ジュバ・アラビア語に対する訳語は英語を用いる。

2. トーンの実現

名詞類を例とするならば、(1) に示すように H と L は音節数に応じて語中の様々な位置に現れることができ、(疑似) 最小対がみられる。さらに、語末では H・L と対立する下降調 F が観察される (ただし F をもつ音節核母音はふつつ長く実現するが、音節末子音が共鳴音の場合に限りこの長母音化は観察されない、例: *sâ* [sâ:] ‘hour’, *sûk* [sû:k] ‘market’, *kêf* [kê:f] ‘how’, *jamâ* [jàmâ:] ‘people’ vs. *sîn* [sîn] ‘China’, *fûl* [fûl] ‘beans’, *dukân* [dùkân] ‘shop’)。なお、L は音声的には中平板ないし低下降調として実現することがある (例: *sâhara* [sâhârà] ‘all-nighter’, *kibira* [kībīrâ] ‘forest’, *dwar* [dʷâr] ‘hunting’)。

ジュバ・アラビア語は基本的には3音節以下の語が大部分であり、4音節以上の語は比較的少なく、あらゆるパタンのトーン分布がみられるわけではない。二重母音を含む語についても、例えば *háí* ‘alive’ vs. *jáí* ‘tea’ vs. *aí* ‘yes’ のような疑似最小対が見られる。

(1) a. 1音節語

- | | | |
|---|------------|-----------------|
| H | <i>sá</i> | ‘correct’ |
| | <i>sín</i> | ‘tusk’ |
| | <i>dúl</i> | ‘shade, shadow’ |
| F | <i>sâ</i> | ‘hour’ |
| | <i>sîn</i> | ‘China’ |
| | <i>fûl</i> | ‘beans’ |
| L | <i>boj</i> | ‘clothes’ |

dwar ‘hunting’

b. 2 音節語

- HH kwátá ‘wrestling’
 dáŋgá ‘bow’
 mápánj ‘monitor lizard’
 HF júgbát ‘type of beans’
 gámbût ‘gunboot’
 HL gára ‘gourd, pumpkin’
 jáma ‘university’
 káŋga ‘kanga (cloth)’
 LH watá ‘ground’
 kení ‘concubine’
 naím ‘mom’ (slang)
 LF jamâ ‘people’
 serî ‘quick’
 dukân ‘shop’
 LL gara ‘bread’ (slang)
 keni ‘church’ (slang)
 kwete ‘white beer’

c. 3 音節語

- HHH báfúrá ‘cassava’
 báŋgírí ‘jaw’
 lókílíj ‘elbowing’
 HHF —
 HHL lónóme ‘hedgehog’
 HLH wótisí ‘sneeze’
 kágoré (~ kágóré) ‘crab’
 HLF lósidâ ‘AIDS’ (cf. フランス語 SIDA)

HLL	sáhara	‘all-nighter’
	kíbira	‘experience’
	táskara	‘ticket’
LHH	adúngú	‘Acholi harp’
	mutéré	‘dried potato’
LHF	—	
LHL	sahára	‘witch’
	karánga	‘dry season’
LLH	sahará	‘Sahara desert’
	gamará	‘moon’
LLF	intimâ	‘meeting’
	seregên	‘earthworm’
LLL	kibira	‘forest’
	laboro	‘banana’
	noŋgoro	‘ugly’

d. 4 音節語

HHHH	mísímísí	‘(person) with narrow eyes’
	jálánjálán	‘playing wheel’
HHHF	—	
HHHL	lókúfíli ~ lúkúlúli	‘bat’
HHLH	—	
HHLF	—	
HHLL	—	
HLHH	—	
HLHF	—	
HLHL	kúrikúri	‘eagle’
HLLH	mútukel	‘tire-sandal’
	kúriwawé	‘type of eagle (archaic?)’

HLLF	—	
HLLL	méderesa	‘school’
	térebija	‘education’
LHHH	alíwára	‘second-hand clothes’
	lokóngóró	‘knuckle’
LHHF	—	
LHHL	ajújúi	‘ululation’
LHLH	sukúlubé	‘school bag’
	semémejó	‘type of small fish’
LHLF	kapáparát	‘butterfly’
	kokánkokân ~ kokókokôn	‘egret’
LHLL	melérija	‘malaria’
	terétere	‘tractor’
LLHH	guluᅅgúlúᅅ	‘round’
	lebenlébén	‘milk bush’ (cf. lében ‘milk’)
LLHF	—	
LLHL	gebelíja	‘tribalism’
	potapóta	‘mud’
LLLH	ateresá	‘dumb’
	cokocokó	‘short stripe’
LLLF	musuturâ (~ musturâ)	‘toilet’
	dirikizôn	‘steering wheel’
LLLL	kobokobok	‘water lily’

以下の例に示すように (2)L と H、あるいは (3)L と F の対立は、機能語について明白な最小対が見られる。

d. LL	abu ‘REL’	abu towîl	‘the long(er) one’
		REL long	
LF	abû ‘father’	abû towîl	‘tall father’
		father long	

語末に現れる H と F は、(1) に示した通り、ある程度は最小対（少なくとも 1 音節語）によって対立していることが明らかであるが、(4) に示すように叙述文末以外の環境では H と自由に交替したり、(5) に示すように重複した際、語中に現れるべき F は必ず H と実現したりするなど、環境によっては対立が弱まる。なお、これと関連する現象として、(6) に示すように頭字語では語末音節のみが F をもつ。

- (4) Jabâb baráu ~ Jabâb baráu (youth only) ‘youth only’
 taâl takum ~ taâl takum (come.IMP IMP.PL) ‘come on (PL)’
- (5) kokân ‘egret’ kokânkokân ‘egret’ (無意味重複)
 seî ‘really, Q’ seî seî ‘very much’
 kēf ‘how’ kēf kēf ‘terrible, what the heck’
- (6) SSTV (South Sudan Television) [és és tí: vî:]
 CPA (Comprehensive Peace Agreement) [sí: pí: ê:]
 UN (United Nations) [jú: ên]

その他、表層的な音声実現としては、(1) 例に当てはまらないような形式も見られる。具体的には、少数の語には (7) 非語末における下降調、(8) 上昇調、などがみられるが、最小対等によって対立を示すことが難しく、現状ではいずれも母音連続として解釈した方が妥当といえそうである。

- (7) téisu ~ téesu [tê:su] ‘to court’
 sáidu ~ sáadu [sâ:du] ‘to help’

- (8) leé [lě:] 'why'
 daáb [dǎ:b] (~ dáb) 'lizard, gecko'
 tuútuút [tú:tú:t] 'poisonous ant'
 títítít [tí:tí:t] 'a type of small bird'
 reéreéet [rě:rě:t] 'a type small bird'

その他、トーンの現れに関わる現象としては、(9), (10) に示すように音声的に母音縮約が生じる場合、音節数が削減されてもメロディは変化せず、結果的に生じる音節をドメインとして曲線声調（下降調ないし上昇調）が出現する、というものもある。

- (9) máfī → [mâ:f] 'there is no'
 jǐbu → [jǐ:b] 'to bring'
 déru → [dê(:)r] 'to want'

(10) a. Apocope

- galí → [gǎ(:)l] 'that (complementizer)'
 derú → [dě(:)r] 'to be wanted' (cf. déru ~ dêr 'to want', see 4.4)
 jaú → [jǎ:] 'here is/are' (vs. ja 'VOC', já 'either, or')
 fataú → [fatǎ:] 'to be opened' (vs. fatá 'unmarried (girl)')
 akaraú → [akarǎ:] 'to be defecated' (vs. akará 'aunt')

b. Syncope

- giníta → [gǐnta] 'anus'
 anína → [ǎn:a] 'we, us'
 belíla → [běl:a] 'dehydrated kiswa'
 abúba → [ǎ:b(:)a] 'grandmother' (vs. ába 'to refuse')
 medída → [mě:d(:)a] 'porridge' (vs. béda 'egg')
 degíga → [dě:g(:)a] 'minute, moment'

c. Monophthongization

guwópa	→	[g ^(w) ǒ:pa]	‘frog’	
sa(h)ára	→	[sǎ:ra]	‘evil eye, witch’	(vs. sára, personal name)
la(h)árba	→	[lǎ(:)rba]	‘spear’	(vs. árba ‘four’)
me(h)íja	→	[mǎ:ja]	‘salary’	(vs. fǎja ‘roasted meat’)
teína	→	[tǎ:nà] ~ [tǎ:nà]	‘our(s)’	(vs. éna ‘eye’)
jom-arbíá	→	[jom-arbǎ:]	‘Wednesday’	
itiópíja	→	[itǒ:píja]	‘Ethiopia’	

3. トーンの静的なふるまいに関するまとめ

以上、特に名詞類に焦点を当ててトーンの静的なふるまいを観察したが、基本的な一般化としては、(11) のような点が挙げられる。特に (11c) の特徴に鑑みると、TBU (Tone-Bearing Unit) はとりあえず音節であるといえそうである。

- (11) a. 3種の声調 (H・L・F) の対立を示す最小対が見られる。(ただし F は語末に限られる、表層的には上昇調も見られる)
- b. 明白な H・L トーンの分布の制約が見られない。
- c. 音節の重さ (開音節か閉音節か) によって現れうるトーンの多様性が変わらない。

以上より、名詞類におけるトーン分布の単純な観察からは、ジュバ・アラビア語はとりあえず「トーン」言語、としておくこともできそうである。しかし、以上から最終的結論を出すことは、以下の2つの事実を無視することとなる。

第一に、量的には、(1) で挙げた諸パタンのうち実際には (12) のパタン、すなわち一語中に一ヶ所のみ H ないし F (太字で示す) をもつパタンに当てはまる語が大部分である。これは、語彙供給言語であるアラビア語スーダン方言 (一般的にはストレス・アクセント言語であると言われる) のアクセント・

パタンが反映されたものである。つまり、大部分の語に関して現れるトーン・パタンの数は、音節数+1=トーン・パタンの数、と示せる。

(12) 1 音節語： **H, F**

2 音節語： **HL, LH, LF**

3 音節語： **HLL, LHL, LLH, LLF**

4 音節語： **HLLL, LHLL, LLHL, LLLH, LLLF**

第二に、次節で述べるように、さまざまな文法的環境において形態統語論的なトーン交替が見られる。そのうち一部には、(12) のパタンに属するものにし適用されない現象 (**H/F** の削除) がみられる。

これらの事実を記述するためには、ジュバ・アラビア語のトーン体系をモザイク的ないし階層的なものと捉え、(12) に属する語類をその下位体系と分析することが最低限必要である。以下ではこの便宜に鑑み、Nakao (2013, 2017) に従って、(12) のパタンに当てはまる語 (類) を「アクセント語 (類)」と名付けておく。ただし、本稿の枠組みでは、「アクセント語 (類)」を本質化することを避けるため、それらについてもあくまで「トーン」のふるまいとして記述し、例えばアクセントの「型」などとしては分析しない。

4. 形態音韻論上のトーンのふるまい

本節の以下に示すように、ジュバ・アラビア語においては、動詞の形態論的交替 (受動態や動名詞化) はトーンの交替のみで標示されるという現象がみられ、「トーンが文法的機能をもつ」タイプの言語であるといえる。この他、接辞付加や複合・重複においても、付随的 (かつ義務的) なトーンの交替がみられる。

4.1 人名形成

ごく少数のアクセント語類については、H を一旦削除し語末音節に H を付与する（言い換えれば H を語末に移動させる）ことで人名を形成する例が見られる。この現象はアクセント型形態論であるといえる。トーン交替のみによる名詞形態論的变化は他に類を見ない。

- | | | | | |
|------------|-----------------|--------|-----------|-----------------|
| (13) abúba | ‘grandmother’ | abubá | ‘Abuba’ | (personal name) |
| jítíma | ‘insultation’ | jítimá | ‘Shitima’ | (personal name) |
| jába | ‘(grand)father’ | jabá | ‘Yaba’ | (personal name) |
| jéna | ‘child’ | jená | ‘Jena’ | (personal name) |

4.2 接辞付加

ジュバ・アラビア語にはあまり多様な生産的な接辞はみられない。ただし、接辞ごとに、語幹にトーン交替がみられるものとみられないものが存在する。まず、(14) のようにアラビア語スーダン方言由来の名詞・形容詞派生接頭辞 abu- 「(唯一の／大きな) ～を持つ (者)」は、語幹のトーンを変化させない。ただし、abu-kada ‘one-legged’ のように、アクセント語類以外も語幹になりうる。

- | | | |
|--------------|-----------------------------------|----------------------------|
| (14) abu-râs | ‘large-headed (person)’ | (râs ‘head’) |
| abu-kúka | ‘(person) with enlarged scrotums’ | (kúka ‘scrotum’) |
| abu-kásuma | ‘big mouth, talkative person’ | (kásuma ‘mouth’) |
| abu-kada | ‘one-legged, lame (person)’ | (kada ‘leg, foot’, slang) |
| abu-keréj | ‘one-legged, lame (person)’ | (keréj ‘leg, foot’, slang) |
| abu-sála | ‘bald-headed (person)’ | (sála ‘baldness’) |
| abu-palamá | ‘(person) with diastema’ | (palamá ‘diastema’) |
| abu-jomîn | ‘right-handed (person)’ | (jomîn ‘right’) |
| abu-mindîl | ‘bishop bird’ | (mindîl ‘handkerchief’) |

abu-ǰôk	‘hedgehog’	(ǰôk ‘needle’)
abu-ǰíǰir	‘pangolin’	(ǰíǰir ‘scale’)
abu-kamsîn	‘centipede’	(kamsîn ‘fifty’)

これに対し、(15) のように、バリ語（東ナイル諸語）由来の名詞・形容詞派生接頭辞 lo- は語幹の音節を全て H に変化させる。同じくバリ語由来の名詞・形容詞派生接頭辞 lú- は語幹を変化させない。これらの接頭辞のホストとなる語幹は、アクセント語類に限られない。

(15) a.	lo-cúmá	‘gluttony’	(cúmá ‘food’, slang)
	lo-rúmbá	‘gluttony’	(rúmba ‘to eat’, slang)
	lo-míǰán ~ lo-mǰán	‘drunkard’	(míǰán ~ mǰán ‘alcohol’, slang)
	lo-pómbé	‘drunkard’	(pómbé ‘alcohol’, slang)
	lo-símó	‘smoker’	(simo ‘cigarette’, slang)
	lo-báǰǰí	‘marijuana smoker’	(báǰǰí ‘marijuana’)
	lo-béled	‘rural person’	(béled ‘country’)
	lo-ǰíǰ	‘stingy person’	(ǰíǰ ‘money’)
b.	lú-kíǰú	‘street boy’	(kíǰú ‘ghetto’)
	lú-míǰán ~ lú-mǰán	‘drunkard’	(míǰán ~ mǰán ‘alcohol’, slang)
	lú-beléde	‘rural person’	(beléde, slang form of béled ‘country’)
	lú-boǰǰo	‘schoolboy’	(boǰǰo, slang form of boǰǰôs ‘schoolboy’)

アラビア語由来の複数形接尾辞 (16) -(C)ât (名詞一般、ただし語彙的に語幹末母音を削除することがある)、(17) -(C)în (形容詞や人間名詞、ふつう語彙的に語幹末母音を削除する) は基本的にアクセント語類にのみ付加され、語幹の H ないし F を削除する。

(16) SG	PL	
nerekûk	nerekuk-ât	‘child’
kôrs	kors-ât	‘course’
milífa	miliġ-ât	‘militia’
bére	ber-ât	‘flag’
mótoro	motor-ât	‘rain’
mundukúru	mundukur-ât	‘Arab, northern Sudanese’
makáku	makaku-wât	‘monkey’
kení	keni-jât	‘second wife’
sâ	sa-ât	‘hour’
mulâ	mula-hât	‘stew, dish’
sabí	sabi-hât (~ suhubân)	‘friend’
dáwa	dawa-jât (~ ádwija)	‘medicine’
séna	sena-wât (~ sinîn)	‘year’

(17) SG	PL	
suwâg	suwag-în	‘driver’
kuwês	kuwes-în	‘good, well’
mújrim	mujrim-în	‘criminal’
sahára	sahar-în	‘witch’
gijáfa	gijaf-în	‘beautiful’
murtâ	murta-în	‘happy’
sukurúji	sukuruj-în	‘drunkard’
gówi	gow-în	‘strong’
kíni	kini-jîn	‘Kenyan (person)’
hílu	hilu-wîn	‘sweet’

バリ語に由来する複数形接尾辞 *-jin* あるいは *-jín* (ただし /ŋ/ の後では *-gin*, *-gín*) は、語幹末音節がそれぞれ H あるいは L/F の場合に用いられる

(トーン極性によって接尾辞のトーンが決定される、あるいはバリ語における音韻論的ふるまいに鑑みれば、語幹末 H の直後では -jín が L トーン化するといえる)。語幹は非アクセント語類である場合が多い。結果としては語中に F が現れるという特殊な語(音韻語)が形成されることになり、理論的分析において問題となりうる。

(18)	SG	PL	
a.	dánǵá	dánǵá-jín	‘bow’
	alíwára	alíwára-jín	‘second-hand clothes’
	lónǵó	lónǵó-jín	‘Arab’ (slang)
	cámá	cámá-jín	‘food’ (slang)
	lo-pómbé	lo-pómbé-jín	‘drunkard’ (slang)
	sumék	sumék-jín	‘fish’ (slang)
	máǵáǵ	máǵáǵ-jín	‘monitor lizard’
	namíǵ	namíǵ-jín	‘mango’ (slang)
	lo-míǵáǵ	lo-míǵáǵ-jín	‘drunkard’
b.	lógóro	lógóro-jín	‘heron’
	lónóme	lónóme-jín	‘hedgehog’
	lókwiǵlíli	lókwiǵlíli-jín	‘bat’
	ǵóǵo	ǵóǵo-jín	‘(edible) termite’
	kwete	kwete-jín	‘white beer’
	muǵga	muǵga-jín	‘stone’ (slang)
	mede	mede-jín	‘school’ (slang)
	sondo	sondo-jín	‘sandwich’ (slang)
	kokánkókân	kokánkókân-jín	‘egret’
	patirô	patirô-jín	‘rich person’ (slang)
	lú-beléde	lú-beléde-jín	‘rural person’ (slang)
	lú-boǵjo	lú-boǵjo-jín	‘schoolboy’ (slang)

jiliŋ jiliŋ-gín ‘bicycle’ (slang)

ただし、この接尾辞は 1970 年代生まれ以上の話者によってはごく少数の例を除いて基本的には用いられず、1980 年代末以後に使用が拡大した一種の若年層変種の特徴であるとみられる。若年層が用いるスラングには、民族語からの語彙借用や、アラビア語由来の語の非アクセント語類的なトーン分布をもつ語への短縮（例えば上記の例では mede < méderesa ‘school’）が多くみられる。つまり、おそらくこの特殊な音韻論的ふるまいをする接尾辞は、こうしたスラングの発展と同期して発生したと考えられる。

4.3 名詞類の複合・重複

名詞同士が複合する場合、最後部の名詞（従属部）語幹以外では、語幹の H/F が削除される。H/F が削除される名詞（主要部）は必ずアクセント語類に属しており、非アクセント語類は複合名詞においては最後部要素以外には現れない。なお、複合語は基本的には ta ‘of’ を用いた属格構造で置き換えることができる（例えば mojo-éna = mójo ta éna (water of eye) ‘tear’）。

- (19) mojo-éna ‘tear’ (mójo ‘water’, éna ‘eye’)
 jubur-watá ‘mushroom’ (júbur ‘penis’, watá ‘soil’)
 ginta-séjera ‘stump’ (gĩntà (~ giníta) ‘anus’, séjera ‘tree’)
 adum-máŋga ‘mango seed’ (ádum ‘bone’, máŋga ‘mango’)
 babur-wasáka ‘dust-heap’ (babûr ‘steamer’, wasáka ‘dust’)
 dawa-mulá ‘spice’ (dáwa ‘medicine’, mulá ‘(main) dish’)
 sidi-mahal-zára ‘field owner’ (sídi ‘owner’, mahâl ‘place’, zára ‘planting’)
- (20) rutan-ŋámbárá ‘Nyangbara language’ (rutân ‘ethnic language’)
 gebila-bari ‘Bari ethnic group’ (gebíla ‘tribe, ethnic group’)
 kis-werewéré ‘plastic bag’ (kîs ‘bag’)

これと同様に、(21) 名詞重複や (22) 副詞重複／重複型副詞（名詞が重複することで形成される）に際しても、前部要素の H/F が削除されるが、その語幹は必ずアクセント語類である。名詞や形容詞が重複するものであっても、(23) 類似性・典型性・分配を表す重複形容詞・副詞では語幹にトーン交替は見られない。

(21) líb	‘play, dance’	lib-líb	‘children’s play’
jéna	‘child’	jena-jéna	‘doll play’
gátar	‘train’	gatar-gátar	‘playing train (with a rope)’
kúra	‘ball’	kura-kúra	‘ponytail’
sabâ	‘morning’	saba-sabâ	‘early morning’
sendûk	‘box’	senduk-sendûk	‘rotating credit’
(22) baráu	‘alone’	barau-baráu (~ baráu baráu)	‘different’
sáwa	‘same, together’	sawa-sáwa	‘equal, even’
birâ	‘slow(ly)’	bira-birâ (~ birâ birâ)	‘(very) slowly’
sabí	‘friend’	sabi-sabí	‘friends to each other’
gerîb	‘close’	gerib-gerîb	‘close to each other’
(23) béled	‘country(side)’	béled béled	‘provincial, countrified’
dínka	‘Dinka (people)’	dínka dínka	‘(precisely) Dinka-ish’
jéna	‘child’	jéna jéna	‘childish’
súmbuk	‘glue’	súmbuk súmbuk	‘gluey, gluish’
mójo	‘water’	mójo mójo	‘watery’
dáwa	‘medicine’	dáwa dáwa	‘mediciny’
tabân	‘tired’	tabân tabân (~ tabán tabân)	‘tired-ish’
háí	‘alive’	háí háí	‘alive and kicking’
ámer	‘red’	ámer ámer	‘completely red’
kwês	‘good, well’	kwês kwês (~ kwés kwês)	‘very good, well’
wáhid	‘one’	wáhid wáhid	‘one by one’

4.4 動詞とトーンのふるまい

ジュバ・アラビア語の動詞は（極めて少数のスラング動詞を除き）全ての動詞はアクセント語類に属し、かつ大部分の動詞は音節数に関わらず語頭音節に H（1 音節語の場合は H または F）をもつ。なお、多くの動詞は語尾 -u をもつが、これを何らかの機能をもつ形態素と認定するのはやや難しい。

- (24) 1 音節語： já ‘to come’, nûm ‘to sleep’
 2 音節語： sùru ‘to drive’, gúna ‘to sing’
 3 音節語： kásulu ‘to wash’, séregu ‘to steal’
 4 音節語： ásurubu ‘to drink’, lákabatu ‘to mix up’

語頭に H をもつ動詞は、語頭 H が削除され、次末音節 (penultimate) が H をもつ（言い換えれば H が次末音節に移動する）ことで動名詞が形成される。結果的に、1・2 音節語動詞はトーン交替しない。

- (25) 1 音節語： já ‘coming’, nûm ‘sleeping’
 2 音節語： sùgu ‘driving’, gúna ‘singing, song’
 3 音節語： **kasúlu** ‘washing’, **serégu** ‘stealing’
 4 音節語： **asurúbu** ‘drinking’, **lakabátu** ‘mixing up’

ただし、一部の動詞は、補充法的な動名詞を併せもつ (kasúlu ~ kasîl ‘washing’)。さらに別の少数の動詞（特に語頭に H をもたない母音 /i/ をもつもの）は、この型の動名詞形成ができず、補充法的な動名詞のみをもつ (istámilu ‘to use’ → istimâl ‘using, use’, imtéhen ‘to have an exam’ → imtihân ‘examination’, intâ ‘to end’ → nihája ‘ending, end’)。その他の動詞は上記の方法でしか動名詞化されない。

このほか、ジュバ・アラビア語では、(26a, b) のように、動詞語幹の H を削除することで、目的語を含む動詞句を抱合的に名詞化することもできる。こ

の構造は、上記のトーン交替・補充法による動名詞を用いた属格構造 (26c, d) でも置き換えることはできる。ただし、(26e-h) に示すような語・句形成は存在しない。なお、上記のトーン交替による動名詞形成をもたない動詞であっても、この目的語抱合は可能である(例えば, *istamilu-gálam* (use-pen) ‘using a pen’).

- (26) a. **kásulu** gumâs (wash clothes) ‘Wash the clothes!’
 b. **kasulu**-gumâs (wash-clothes) ‘washing the clothes’
 c. **kasúlu** ta gumâs (washing of clothes) ‘washing (of) the clothes’
 d. **kasíl** ta gumâs (washing of clothes) ‘washing (of) the clothes’
 e. *kasúlu gumâs
 f. *kasíl gumâs
 g. *kasil-gumâs
 h. *kasulu ta gumâs

先述の、トーン交替による動名詞形成と関連する現象として、名詞や形容詞の H を語頭に移動させる(かつ語尾 -u を付加する)ことで動詞派生が行われる。

- (27) *gísir* ‘peel’ *gísiru* ‘to peel’
hílim ‘dream’ *hílim(u)* ‘to dream’
dusmân ‘fight’ *dúsman(u)* ‘to fight’
rutân ‘ethnic language’ *rútan(u)* ‘to speak in one’s ethnic language’
gurbâl ‘sieve’ *gúrbalu* ‘to sieve’
tarbâs ‘bolt’ *tárbasu* ‘to bolt’
futûr ‘breakfast’ *fúтуру* ‘to have breakfast, to break fast’
garâma ‘fine’ *gáramu* ‘to fine’
zírâra ‘button’ *zíraru* ‘to button’
mókuwa ‘iron’ *mókuwa* ‘to iron’

waskân ‘dirty’ wáskan(u) ‘to make dirty’

以上の他、ほぼトーン交替のみによる動詞形態論交替として、動詞語幹の H を動詞末に移動させる（あるいは動詞末母音が a/e の場合は接尾辞 -ú を付加する）ことで、受動態が形成されるという現象がみられる。なお、ジュバ・アラビア語は基本的には SVO 語順であるが、(29) に示すように受動文では主語が必ずしも動詞に先行しない。

(28) ACTIVE	PASSIVE	
séregu	seregú	‘to steal’
ńákamo	ńakamó	‘to rob’ (also ńákamu vs. ńakamú)
háki	hakí	‘to narrate’
kóre	koreú	‘to cry’
ágara	agaráú	‘to read, study’

- (29) a. úwo dúgu ána. (3SG hit 1SG) ‘He hit me.’
 b. dugú ána. (be.hit 1SG) = ána dugú. (3SG be.hit) ‘I was hit.’

なお、一部のオノマトペ / イデオフォンの動詞は (30) のような疑似重複形式をもつ。このとき、重複要素が二音節である場合には、語頭の重複要素すべてが H、語末の重複要素はすべて L として実現する。これと同様、あらゆる動詞（オノマトペ的動詞を含む）は完全重複させることで反復・多回数性 (frequentative) を表すことができるが、その際にも (31) のように前部要素はすべて H、後部要素はすべて L となる。

(30) fétfet	‘to jerk’	tóktok	‘to bubble, boil (intransitive)’
fúrfur ~ fúrúfuru	‘to be itchy’	léklek ~ lékéleke	‘to do slowly’
múnúmunu	‘to cheat’	lángálanga	‘to wander’

(31) nûm	'to sleep'	núm-num	'to sleep repeatedly'
dúgu	'to hit'	dúgú-dugu	'to hit repeatedly'
háki	'to narrate'	háki-haki	'to narrate habitually'
séregu	'to steal'	sérégú-seregu	'to steal habitually'
ásurubu	'to drink'	ásúrúbú-asurubu	'to drink habitually'
léklek	'to do bit by bit'	léklék-leklek	'to do bit by bit habitually'
múnúmunu	'to cheat'	múnúmúnú-munumunu	'to cheat habitually'

なお、これら（疑似）重複動詞についても、語末から二つ目の音節に H を移動することで動名詞が、語末に H を移動する（-ú を付加する）ことで受動態が形成される。

(32) VERB	VERBAL NOUN	
laŋgálaŋga	laŋgaláŋga	'to wander'
gúná-guna	guna-gúna	'to sing repeatedly'
fékírú-fekiru	fekiru-fekíru	'to think repeatedly'
(33) ACTIVE	PASSIVE	
múnúmunu	munumunú	'to cheat'
sérégú-seregu	seregu-sérégú	'to steal repeatedly'
ásúmá-asuma	asuma-asumaú	'to listen repeatedly'

5. まとめ

本稿では、ジュバ・アラビア語におけるトーンのふるまいに関わるデータを提示した。最小限の音韻論／形態音韻論的一般化としては、ジュバ・アラビア語では H・L の対立が基本的である（ただしほぼ語末に限り H・L・F が対立する）こと、これらのトーンの実現に関わる TBU は音節といえること、そして特に動詞形態論においてはトーンの交替が明らかに文法的な機能を有する、

あるいは一部の(分節音からなる)形態素の付加に付随してトーンが交替すること、などを示した。

文法(形態論/形態統語論)と関わるトーン交替は、名詞形態論については(34)、動詞形態論については(35)のようにまとめることができる。

(34) a. PERSONAL NAME FORMATION (H shift)

jába ‘grandfather, old man’ → **jabá** ‘Yaba’

b. ARABIC PREFIX abu- (no alternation)

kamsîn ‘fifty’ → abu-kamsîn ‘centipede’

c. BARI PREFIX lo- (stem as all high)

pómbe ‘beer’ (slang) → lo-**pómbé** ‘drunkard’ (slang)

simo ‘cigarette’ (slang) → lo-**símó** ‘smoker’ (slang)

d. ARABIC PLURAL SUFFIX -(C)ât, -(C)în (H deletion in the stem)

makáku ‘a monkey’ → **makaku-wât** ‘monkeys’

sahára ‘a witch’ → **sahar-în** ‘witches’

e. BARI PLURAL SUFFIX -jin/jín WITH POLAR TONE (no alternation in the stem)

dángá ‘a bow’ → dǎngá-**jín** ‘bows’

lógóro ‘a heron’ → lógóro-**jín** ‘herons’

f. COMPOUNDING AND REDUPLICATION (H deletion)

mójo ‘water’ + éna ‘eye’ → **mojo-éna** ‘tear’

sabâ ‘morning’ → **saba-sabâ** ‘early morning’

以上の動詞に関わるトーン交替(重複を含む)は、下記のようにまとめることができる(ただし **kásuru** ‘break’, **bêt** ‘house’)

(35) a. ACTIVE (word-initial H, all H in the first element of the reduplicative verb)

kásuru **bêt** ‘Demolish a house!’

kásúrú-kasuru **bêt** ‘Demolish a house progressively!’

b. PASSIVE (suffixation of -ú or H shift to the word-final syllable)

kasurú bêt ‘a house was demolished’

kasuru-kasurú bêt ‘a house was demolished progressively’

c. VERBAL NOUN (H shift to the penultimate syllable)

kasúru ta bêt ‘demolishment of a house’

kasuru-kasúru ta bêt ‘progressive demolition of a house’

d. INCORPORATIVE NOMINALIZATION (H deletion)

kasuru-bêt ‘demolishing a house’

kasuru-kasuru-bêt ‘demolishing a house progressively’

本稿では、以上のようにジュバ・アラビア語ではトーンが弁別であるといえることに加え、トーンのふるまいは完全に一貫した単一のシステムをなすわけではなく、「アクセント」的な（すなわち1語中に一度しか H ないし F が現れないという）トーンのふるまいをみせる語類・形態論と、そうしたふるまいをみせない語類・形態論が分裂的に共存していることを記述的に示した。これにより、ジュバ・アラビア語は少なくとも単純に「アクセント言語」であるとはできないことが、ほぼ生のデータによって示された。

なお、本稿では議論の簡素化のため触れることができなかったが、ジュバ・アラビア語がトーン・センシティブな言語であることは、ジュバ・アラビア語によることば遊びや、歌のメロディとトーン的一致現象などによっても示唆されている（仲尾 2013, Nakao 2017）。

既に Nakao (2013, 2017) で指摘したとおり、こうした分裂的なシステムは、アクセント型上層言語とトーン型基層言語の接触の結果として発生・発展した言語変種についていくつか報告がある。アラビア語など、本来「アクセント」として分析することが妥当である言語が、濃厚な言語接触の結果「トーン」型としても分析しうる複合的システムへと変化することや、こうした複合的システムが接触言語という枠を超えてどの程度一般的であるといえるかについては、今後の音韻研究の深化に鑑みて議論されるべきテーマである。

謝辞

本稿はアジア・アフリカ言語文化研究所研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」(研究代表者: 梶茂樹、2016-2018年度)の成果物であり、2016年度第3回研究会(2016年10月22日)での著者による発表「ジュバ・アラビア語のトーン類型は可能か」をもとに大幅に改訂を行ったものである。本稿改訂にあたって有益なコメントをいただいた梶茂樹・若狭基道両氏には記して謝意を表したい。

略語

IMP: imperative (命令法), IRR: irrealis (非現実法), IPFV: imperfective (未完了相), PL: plural (複数), Q: question particle (疑問文小辞), REL: relative clause / attributive marker (関係節・形容詞限定用法標識), SG: singular (単数), VOC: vocative (呼格)

参考文献

- 仲尾周一郎 (2013) 「南スーダンのことば遊び: 「ルドリング」の類型論への視点」『地球研言語記述論集』5: 73-86.
- Nakao, Shuichiro (2013) “The prosody of Juba Arabic: split prosody, morphophonology, and slang.” In Mena Lafkioui (ed.) *African Arabic: Approaches to Dialectology*, pp. 95-120. Berlin: de Gruyter.
- Nakao, Shuichiro (2017) *A grammar of Juba Arabic*. Doctoral dissertation, Kyoto University.